

アマガサキ

Amagasaki

2022 ISSUE Two

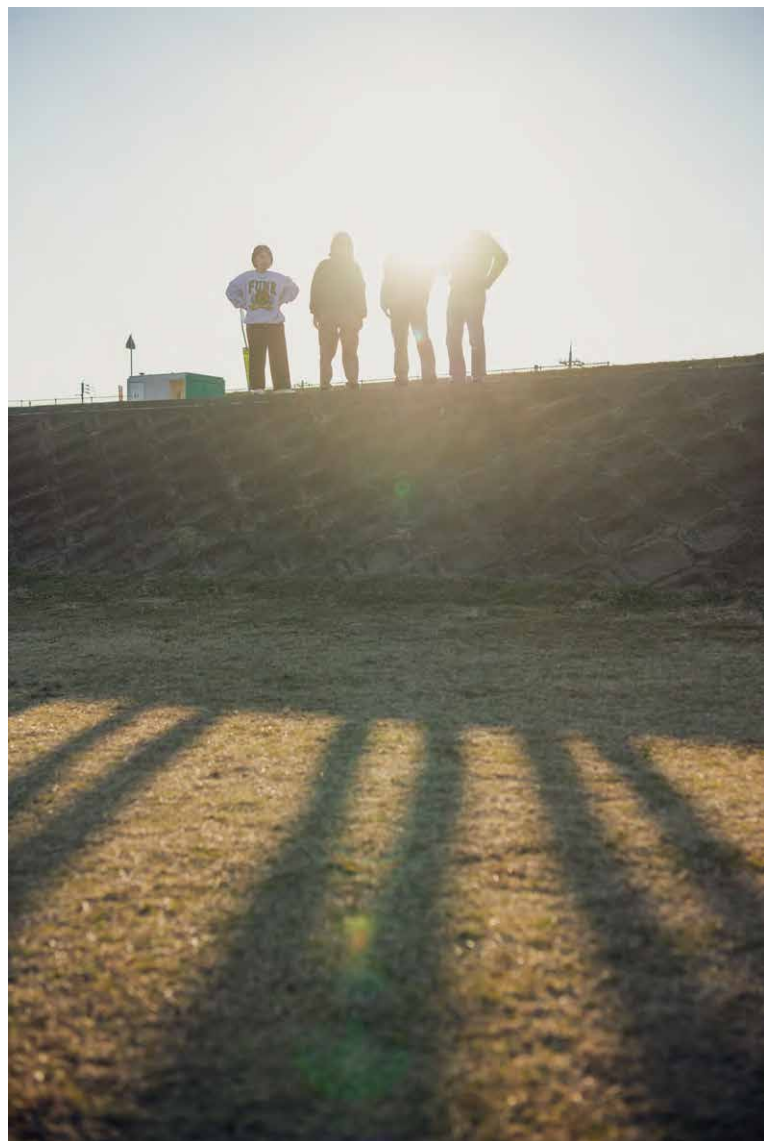
クセになる街



TAKE FREE

THE STYLE OF YOUTH

わたしらしく、あまらしく。



Photographs ROB WALBERS (UN +PLUS UN)
 Art direction YOSHITAKA SUYAMA(HAREBARE inc.)
 Lettering MAIKO HARADA

いつだって、 自分らしく生きたい。

自分の夢中になれる何かをひたすら追いつける。
 自分にとっての試練すら力に変えて、
 誰かのために本気になる――。

ここに登場するのは、そんな尼崎の若者たち。
 学校、友達、将来。
 悩みは尽きないし、自分自身との葛藤も絶えない。
 だけど、どんな時でも自分らしく生きることへ貪欲。
 取材を通して、この街で自分を表現して生きる、
 若者のリアルが垣間見えた。

「あま」とは、この街の愛称。
 多様な人が集い、つながり、広がる。
 そんな「あまらしさ」はきっと、
 若い世代が自分らしく生きられることにも
 連なっていく。

今を生きる彼らのストーリーにふれて、
 ぜひ確かめてみてほしい。





字に思いを乗せて
凜と舞う。

「お願いします！」

空気を震わすほどの力強い声から、書道パフォーマンスが始まった。音楽に合わせて舞いながら、大きな筆で文字を書き上げていく。全身で跳ね上がり筆を落とすと、墨が勢いよく飛んだ。

彼女たちは尼崎双星高等学校の書道部。古くからの書道の伝統と芸術を掛け合わせたダイナミックな演技で、数々の舞台で活躍するパフォーマンス集団だ。

普段はみんな、至って普通の高校生。「お願いします」と言った瞬間にスイッチが入るのかも。全員の表情が一変する瞬間にも圧倒される。大筆を乾かすだけでも2時間はかかると言

い、練習にかける時間も体力も並大抵ではない。書道やダンスの未経験者も多いが、「書き上げた達成感がすごい。大変だけど、大きな拍手で報われます」とその一瞬のために練習を続ける。

一文字、一文字、思いを込める。部員みんな力を宿した言葉たちが、見る者の心を動かしている。



北消防署で、「予防救急」「救命の連鎖の大切さ」をテーマに行ったごん身のパフォーマンス。文字や選曲などはすべて部員で考える。この他、成人の日のつどいなどさまざまなイベントに出演



僕らが動けば
未来が変わる。



定期的に開催する体験会。「ボード買ったよ!」と何度も参加してくれる子もいるそう。「技ができたらみんな喜んでくれる。スケボーはコミュニケーションツールでもありますね」

【尼崎市 まちづくり】でたまたま検索した先は夢が実現した未来。そんなストーリーも、この街ならあり得る。
「スケボーを始めたものの、できる場所が全然ない。自分から動かないと変わらへんと思って、市に言ってみようと思ったんです」と、ストリートチーム・ASKの発起人の彼は話す。そして検索で偶然にも引掛かったのは、市のホームページにあるまちづくり提案箱。そこに送った一通のメールから、スケートパーク設立の夢がリアルに動き始めた。
「ボードを持つただで通報されたこともある」。五輪競技でもありながら、未だに潜むネガティブなイメージ。それを払拭(ふっしょく)したいと定期的に開催する体験会では、予想を超える数の子どもやその親が集まりにぎわいを見せる。「ファミリーで安心して来れる場所はまさに理想の形。めちゃくちゃうれしいです」。パーク設立を目標に動き続ける。生まれてからずっと尼崎。「これからも離れたくないですね。スケボーにも、尼崎にも夢中です」と笑った。



暗い世の中を

「食」で明るく。

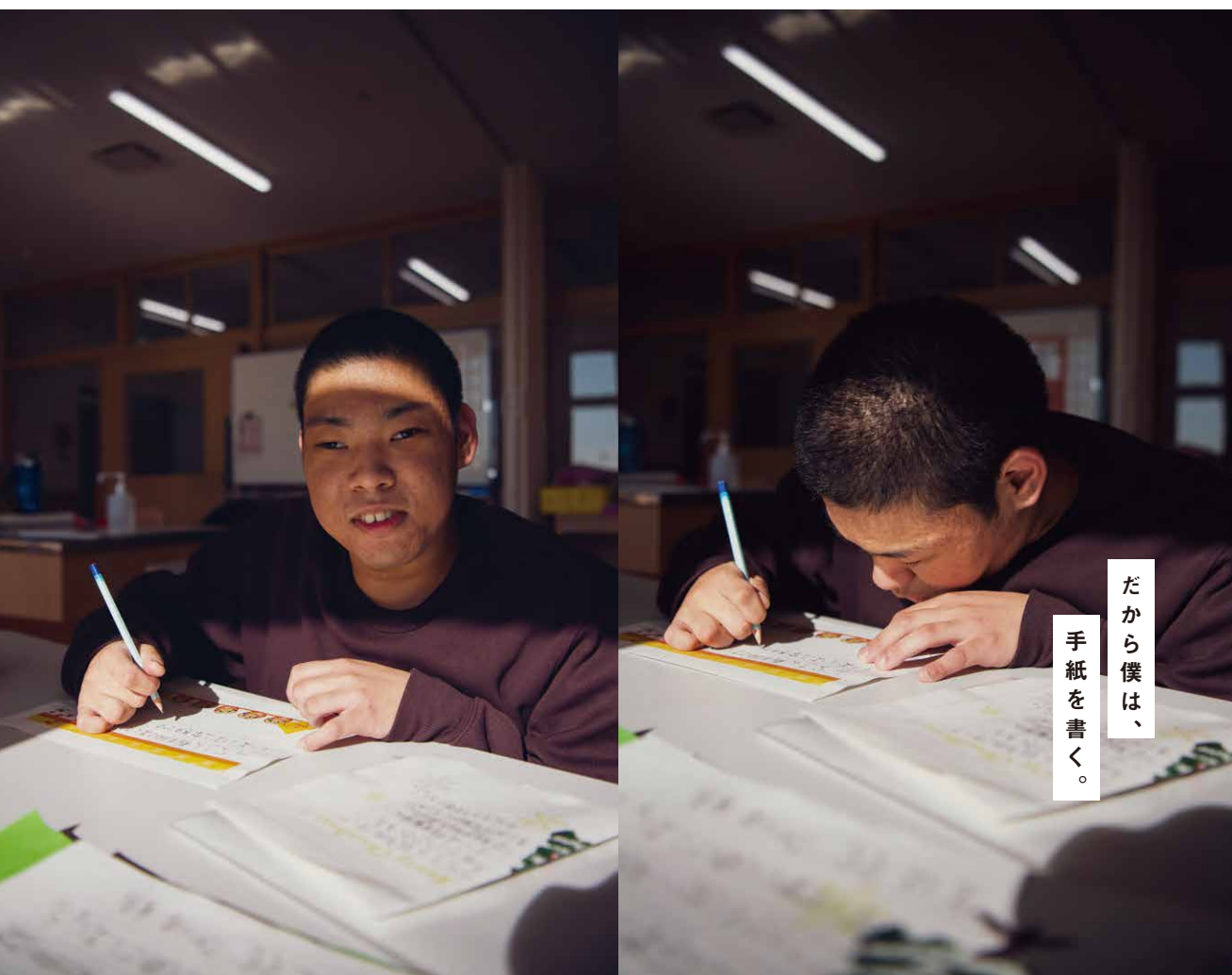
「尼崎のリユミエール」。尼崎の光、を意味するこの言葉は、育成調理師専門学校高等学校に通う彼ら3人のチーム名だ。

「世の中が暗くなっている今だからこそ、食を通して元気づけられる光になりたくて」。そんな願いを胸に昨年挑んだのが、全国高校生食育王選手権大会。学生たちのアイデアで、地域ごとの悩みを「食」で解決するというテーマ。過去にはメンバーのうち上級生の2人が特別賞に輝いた。市内の農家へ足を運び、尼崎の伝統野菜・田能(たの)の里芋とイノシシ肉を使ったインパクトある二皿を仕上げた。

短い準備期間で奮闘。このメンバーでは入賞こそ逃したが、みんなの顔は思いのほか晴れやかだった。「日本には知られていない食材がまだまだある」「食に興味を持つ人がもっと増えたらいいな」と、食に対する熱量は増すばかり。この先、3人はそれぞれ別々の料理の道へ。尼崎、いや、いつかは日本中を「おいしい」で明るくする、まぶしい光になるかもしれない。



神戸のホルスタイン種の牛肉を、つくねのような形にして提供。何度も試作を重ねながら、「食感がある肉を食べやすく、程よい歯ごたえを感じられるように工夫しました」



だから僕は、
手紙を書く。



尼に、
家族が
100人
いる
気分。



立候補前のタイミングで「これしかない！」と書いたこの2文字。『目つきが全然違いました。自分が先頭に立ってやらないとあかんという責任感も強い』と先生。一回り大きく成長した

あまよう特別支援学校。高等部の彼が生徒会長になってから欠かさず続けているのは「会長からの手紙」だ。

ほぼ週に1度、小学部から高等部までの全学年に向けて手書きで言葉を送る。季節のこと、行事のこと、時には個人的なエピソードも。なんと入院中も、病室から先生に「LINEでメッセージを託した。『みんなとの関わりをつくりたい。教室を回ってあいさつをしたかったけど、コロナ禍で断念。代わりの形がこの手紙です』」

式典でのあいさつや役員会の取りまとめもこなし、今や生徒にも先生にも頼りにされる存在だが、実は人見知り。『誰よりも思いやりを持つ彼なのに、前へ出ないなんて...』。生徒会長立候補への背中を押したのは、先生だった。

「僕、やります」と返事をした時には、もう表情は別人だった。当時の書き初めには「自立」の2文字。リリしい文字からは、未来へ向かう気迫を感じた。「みんなのこと、ほっとけない」。その優しさを乗せて、手紙は任期満了まで書き続けると決めた。



「市役所の人にも情報を教えてもらってます」と、市内のイベントにもガンガン参加する。受験生の夏休みでも「人としゃべりたすぎる」とボランティアへ行くほど人が好き

よくしゃべり、よく笑う。「人と関わるのがほんまに好きなんです！」という言葉に即、納得してしまった。

人懐こい彼女だが、中学生の頃までは毎日閉鎖的に感じていたのだという。世界が広がったのは高校生の頃。ボランティアに興味のある彼女は、とあるイベントに参加した。そこで出会ったのは、今では「頼れるお姉ちゃんみたいな存在」だという福祉の仕事に携わる女性だった。狭い世界でくすぶっていた様子を見て、新たな経験や人との出会いを惜しみなく与えてくれた。

「市議会議員の方と出会うこともありました。政治家って怖そうって思ってたけど、全然そうじゃなかった。他人事だと思ってた政治が自分事になりました」

数珠つなぎのように出会った人とはSNSでも友達になり、この3年間で100人を超えた。「私が弱音を投稿したら励ましてくれる、めちゃくちゃ心強くて楽しい大人ばかり。全員家族やなって勝手に思ってます(笑)」



もどかしさを
アクションに。



かなえない未来は、
自分で描く。



洋服の端切れをみんなでタペストリーに仕立てる、参加型のワークショップも行った。「イベントの開催には横のつながりが欠かせなかった。尼崎という地域の強さを実感しました」

学生団体「AMBITIOUS」。野心的な、というその言葉の中には、尼崎(AMAGASAKI)と学生(Student)の頭文字が潜んでいる。

その名の通り、尼崎の高校・大学生のメンバーで活動するグループ。出会は市が開催する祭りのボランティアだったが、コロナ禍で中止に。「せっかくの出会い。何もしないで解散したくない」という思いが一致した。活動の方向性を決めるところからスタートを切った。

そんな彼らの初チャレンジは、「THE FIRST AKINA」という一日限定のチャリティショップ。引越で服を処分することになったメンバーの一人がふと感じた「もったいない」を発端に、園田の「チャリティショップ ふくる」とタッグを組み、古着の販売を実現させた。

「成長したいけど何をしたらいいかわからない、そんな学生が集まって育つプラットフォームになっていたら」。学生のための出会いと経験の場が、尼崎の地で始動した。



「まだ全然うまくないけど…」と見せてくれたけん玉。「世界ではストリートカルチャーとして定着してる。ファッションの一部になっている人もいるし今までとは全然違う技もあります」

「年齢も性別も人種も関係ない。誰とも友達になれる、それがストリートカルチャーの魅力だと思います」

中学2年生の頃、B2Xの動画に釘付けになった。「カッコいいな、自分もこんな風になりたい」。最初はYouTubeからの独学。スケボーにもハマっていった。「乗ってるだけで声を掛け合ってる友達ができちゃう。そうやってつながっていきるのが他のスポーツとの違いかも」

ただ、B2Xもスケボーも練習できる場所が少ないことが悩みだった。

「ユース交流センターに行ったことがきっかけで、僕と同じように感じていた人たちとチームを組んで『尼崎にスケートパークをつくろう』っていう動きができました」。彼はその代表としても、パーク設立に向けて本腰を入れている最中だ。

今春から通う東京の大学では写真学科へ。「いろんな人とつながって一緒に楽しみながら、カメラマンとしても写真が撮りたい」。生き方に枠なんてない。そんなことを気付けさせてくれた。



大好きな場所を
守りたい。



「リアル」を、
伝えていきたい。



2人が企画したイベント「西武庫公園は宝島！」は大盛況。チーム対抗で、ごみをゲーム感覚で拾った。「『絶対またやってね』と言われるくらい喜んでくれたので達成感もすごかった！」

動物や自然が大好きな2人は、海洋ごみや生態系のことも気掛かり。「まずはここから。いつか世界のごみ問題の解決につなげたいな」

6年生になった時から本格的にごみ拾いを始めた。ポイ捨てをなくす活動がしたいと、ゆうやけプラザ(武庫西生涯学習プラザ)に行って地域の人たちの前でプレゼンもした。「ごみ拾いを始める前、ウミガメの鼻にストローが刺さって傷付いている映像を見て悲しかった。今こうして動けたのがうれしい！」

彼女たちは同じ小学校の同級生。市外から引っ越して来た2人も、緑いっぱいこの大きな公園がお気に入り。そんないつもの遊び場に、ある日大量のごみが散乱していたことにショックを受けた。「割れたガラス瓶や、飲みかけのお酒も。小さい子が飲んでしまったら命に関わるのに…。正直イラッとしました」

日曜日、西武庫公園のごみを拾い集める小学生2人組がいる。取材日も待ち合わせ前からごみを集めていた。手にはすでに、ウイスキーの瓶が2本。



高校2年生の夏休みには、市教育委員会と尼崎市国際交流協会共催の海外語学研修派遣事業でマレーシアへ。「人間ってこんなに違うんや！」と衝撃だったこともまた、価値観を大切にすることにつながった

彼等たちは、何をするかよりも「誰に」教わるかが大切なのかもしれない。そう感じさせてくれたのは、社会の教師を目指す彼の生き方。

現在大学生。将来を決めたのは中学生の頃で、当時の先生の憧れから。「人としてもブレがなくてカッコいい。それは現在の彼の輪郭をつくった。「教師になる前に一度社会に出て、社会人としてリアルな現実を体験してから生徒に伝えていきたいんです。社会という教科を教えるなら、まずは僕がリアルを知らない」と。それこそが恩師が歩んできた道だった。

今は母校の中学校で授業補助も。

「価値観は一人ひとり違うから、生徒の解答や意見が違っていても、絶対に否定から入らないようにしています」。これも恩師から学んだ大切なこと。先生と生徒は対等関係だと話す。「生徒は若いインスピレーションを教える。逆には僕は、教科書だけじゃ得られない、生きていく力を彼らに伝えられたら」。目の前にはもう、歩むべき道ができていた。



安全で安心な
居場所をここに。



私にも
できることが
あるんだ。



定期的なミーティングで意見を交わす。「当事者としても先輩で、姉貴的な存在。僕も救われてます」「彼は真っすぐで活動に対する思いが熱く、頼もしい!」と、互いに心強い存在

「ヤングケアラーって、その人の一側面ではない。私たちは、その人自身とつながり続けたいです」

ヤングケアラー。法令上の定義はないが、病気や障がいがある家族の介護や家事、感情面のサポートなどを担う18歳未満の子どもたちを指すことが多い。互いに当事者でもある2人は、その経験を生かして活動中。ケアを引き受ける子どもが悩みを発信できないことや、子どもらしい生活ができない状況に対する支援が必要不可欠だと口をそろえる。

「ケアの責任のすべてを家族が担わないといけない」という誤解もあれば、福祉制度の問題もある。これは決して子どもたちだけの問題じゃないと思います」

目指すのは、自分の好きなことやケアのつらさを素直に話せる、いつでも受け入れてもらえる、安全安心で温かな居場所づくり。これからは、正しい理解の普及活動を尼崎から進めていく。「すべての人を救うのは難しい。でもほんの一人でもいいから、誰かに何が届けばいいな」



当日は、会場に多くの方が足を運んだ。「1人の思いつきが発展して、いろんな人に協力してもらって実現できた。思い切ってやってみて良かったです」と振り返る

演劇部に所属する彼女は、ある日アルバイト先のコンビニで、高齢者にこう話し掛けられた。「独りでどうしたらいい?この先が不安やわあ」衝撃の一言だった。自分にできることがしたいけど、どうすれば、そこで出会ったのが、市がまちづくりに挑戦する高校生を募集する「あまらぶチャレンジ事業」。先生の後押しもあり、心を決めた。「せっかくなので演劇部なんやし、何か私もやってみよう」

訪れたのは高齢者施設。施設長との話で、孤立の意味を自分なりに落とし込んだ。劇の題材は認知症の高齢者と特殊詐欺。アルバイト先で実際に起きた内容を基に台本を書いたが、詐欺予防を訴えただけではない。彼女の狙いは、上演後の交流会だった。

来場者の子どもから高齢者まで、「最近どう?」をテーマに盛り上がった。

「みんなと話せて良かったと言ってももらえなかった。孤立した高齢者の心を明るく、外に出るきっかけを。そんな願いから実現させたこの舞台で、彼女の思いが届いた瞬間だった。



もっと強い

自分に出会いたい。

「ボクシングを始めて心が一番変わりました。もっとやりたい、もっと強くなりたい。やるなら迷いのない口調。リングに上がリグロップをはめると、まるで別人のような目つきになった。パンチを打った時、空気を割るような重い音が響く。」

同じボクシングジムに長年通う父の勧めもあり、週に4日練習を重ねる。「ボクシングをしていると無心になれる。学校や友達とボクシングは別物。ここは自分の世界って感じですよ」

以前は飽き性だったという。初めて夢中になれるものを見つけた、そんな喜びであふれているように見えた。

「やめとけっていうも父に言われるけど、将来は警察官になりたいです」

実は彼の父親は警察官。フレンドリーだけど真面目。かっこいい背中に憧れて、追い掛けたと思うようになった。

父の隣で、今日もひたすらミットを打つ。心も体も強靱(きょうじん)に、たくましく。進化が止まらない。



父と一緒にジムへ行き、ボクシングを教わっている。「強くなっていったと思う」と話す彼に対し、「身長も伸びた。変わったなと思います」と、息子の成長を実感している様子



てんかんの私から、

逃げない。



商店街と一緒に

大人になった。



2021年8月、尼崎の若者によるプロジェクトチーム「Up to You!」のメンバーとして、尼崎市長らの前でプレゼン。症状や発作時の対応を書き込める「てんかんマーク」を提案した

「当事者のみんなと同じように、私もまだ、病気を受け入れてる途中」。一歩ずつ、強く、前へ進む。

「当事者のみんなと同じように、私もまだ、病気を受け入れてる途中」。一歩ずつ、強く、前へ進む。

「当事者のみんなと同じように、私もまだ、病気を受け入れてる途中」。一歩ずつ、強く、前へ進む。

「当事者のみんなと同じように、私もまだ、病気を受け入れてる途中」。一歩ずつ、強く、前へ進む。

「当事者のみんなと同じように、私もまだ、病気を受け入れてる途中」。一歩ずつ、強く、前へ進む。

「当事者のみんなと同じように、私もまだ、病気を受け入れてる途中」。一歩ずつ、強く、前へ進む。

「当事者のみんなと同じように、私もまだ、病気を受け入れてる途中」。一歩ずつ、強く、前へ進む。

「当事者のみんなと同じように、私もまだ、病気を受け入れてる途中」。一歩ずつ、強く、前へ進む。

「当事者のみんなと同じように、私もまだ、病気を受け入れてる途中」。一歩ずつ、強く、前へ進む。

「当事者のみんなと同じように、私もまだ、病気を受け入れてる途中」。一歩ずつ、強く、前へ進む。



アルバムには貴重な昔の店の様子も残っていた。「私もこの写真を見るのは初めて。お菓子を量り売りにしたようですね。当時は住み込みの人もいるぐらい、繁盛していたと聞いてます」

「小さい頃は店でおまき」ことをしたり、店番中に向かいの漬物屋のおっちゃんにこっそりサンドイッチをもらったり。ずっとこの店と一緒に育ってきました」

三和本通商店街。この地で約70年続く「お菓子の白光堂」は、彼女の祖父が先代から受け継いだという老舗。現在は母親と、彼女が「おばちゃん」と呼ぶ勤続60年の大ヘテランが店に立つ。

「商店街中が私の成長を見届けてくれた感じ。成人式では近くの店の人たちも喜んでくれて、振り袖で商店街を歩いてあいさつしたり写真を撮ったりしました」と、母親と同じように、自分もみんなに見守られて大人になったと話してくれた。

常連客がくつろいで帰る昔ながらの光景も残るが、最近始めたインスタグラムを見てやってくる新しいお客さんも、「おじいちゃんが大事にしてきた店を残したいな」

将来の夢は看護師。誰かの記憶に残る人になりたい。たぐさんの愛を受けて育った彼女だからこそ、きつと人に寄り添える人になるのだろうか。



石は輝いてるだけじゃない。



この街で、
新しい自分を発見。



ジムの一角にある棚。「化石みたいなんが見えるねん」という、拾ってきた岩石もここに。アメジストや水晶ジオードといった美しい石の数々や図鑑など、まさに宝物が並ぶコーナーだ

「なあなあ、石墨の別名って何やと思う？」
「ラファイト」って言うねんで」
彼が大好きなのは鉱物などの石。5歳の時にクリスマスプレゼントにももらった図鑑をきっかけに、岩石や鉱物、化石の世界にハマった。化石鉱物展で初めて実物を見た時は2時間もその場から動かず、お年玉の全額を石につき込んだ。
両親はボクシングジムを運営。ジムの一角には、大好きな鉱物や、武庫川で拾ってきた岩石などを集めた宝物コーナーがある。「石はただきれいに輝いてるだけじゃない。結晶の構造が複雑で、それを知るのが楽しい」
石は地球の歴史を感じられることも魅力だという。「ダイヤモンドは何億年もの時を経てここに。ポンポンできるもんとちゃう。日常にある車やフライパンだって鉱物でできてるから、無限じゃないねん。だから大事にせなあかん」
そんな彼の夢は世界中を旅すること。「新種の鉱物を発見したり、恐竜の化石を発掘したりしてみたい」と本気だ。



幅広い年齢層が集まる、まちづくりに関する相談会「みんなのホームルーム」にも参加。「尼崎は私の地元とは全然違う。地域に対してオープンな場所が多いことに驚きます」

家庭でも学校でもない。武庫地区の子ども食堂「晴れるや」は、大人も子どもも優しく迎え入れる、第二の家のような場所。そこで活躍するのは、東京から来た大学生の彼女だ。進学のため関西へ。たまたま気に入った家が尼崎にあったことから、この街での暮らしがスタート。ご縁がトントン拍子でつながり、「いつの間にかスタッフになってた感じ。地域に関わる活動なんてしたことなかったのに」と笑う。
小学生の学習サポートを担当。自身が5人きょうだいの長女ということもあり、一緒に遊んで遊ぶみんなのお姉さんの存在でもある。「子どもも食堂って、名前を聞いたことがある程度でした。食事を提供するだけかなと思っていただけで、『晴れるや』は地域にあるもう一つの家みたいな感じで、イメージが変わりました」
知らない土地でのチャレンジ。子ども食堂以外の地域交流も始めたという彼女はすっかりこの地に溶け込み、自分らしく輝いている。



「昔の名残」に
キュンとする。



みんな、輝ける
場所がある。



最近ストリートピアノを弾くのがマイブーム。やってみたいと思うことはどんどん増えていく一方だが、歴史にキュンとした気持ちを出してはまた、古地図を調べているのだとか

「地元の歴史がこんなに好きなのは、塚口神社祭りの影響です」。目を輝かせながら話す彼女は、日本の伝統や歴史が大好き。地域の祭りで出会ったおじいさんに『昔、この場所はね…』と教わった話から、現在とはかけ離れた当時の姿を知った。自分の知らない歴史にふれて、思いがけず感動した。

それ以降、自分の今住んでいる場所にはどんな人が住んでいたのだろうか？ と思い立ち、図書館に通っては古地図で歴史をさかのぼり、昔の姿を想像している。阪急塚口駅周辺には今はなき塚口城をしのぶ歴史の跡があるが、「そういう昔の名残を見ると、ときめいちゃっ」

聞くと、「とにかく楽しんでやってみる」がモットーらしく、歴史探求は数ある関心の一つなのだそう。その言葉通り、市が募集する市民企画委員としても街を楽しみながら、ストリートピアノやダンス、ギター…と趣味にも全力。「何もできない人にはなりたくないけど、どこか欠けている人がいいな。そんな人が魅力的だと思うから」



ロンドンでは、コンビニの数と同じくらい多くのチャリティショップがあったそう。「日本にはないファッションセンスも刺激的でした。こういう発想もあるんや…と勉強になりました」

ここは「チャリティショップぶくる」。買い取りではなく「寄付」された服を販売するイギリス発のスタイルで、日本ではまだまだ珍しい。店で働くのは、障がいがあり車いすを利用する人たち。心の底からファッションを愛するメンバーがそろい、開店当初から働く彼も、もちろんその一人だ。

以前は作業所で働いていたという。こんなにおしゃれが好きなのに、働ける場所が見つからず、生活も不安定だったそう。大好きなパパレルに携わるどころか、仕事への誇りや夢も持てない。将来の選択肢にはいつの間にか諦めが付きまわっていた。

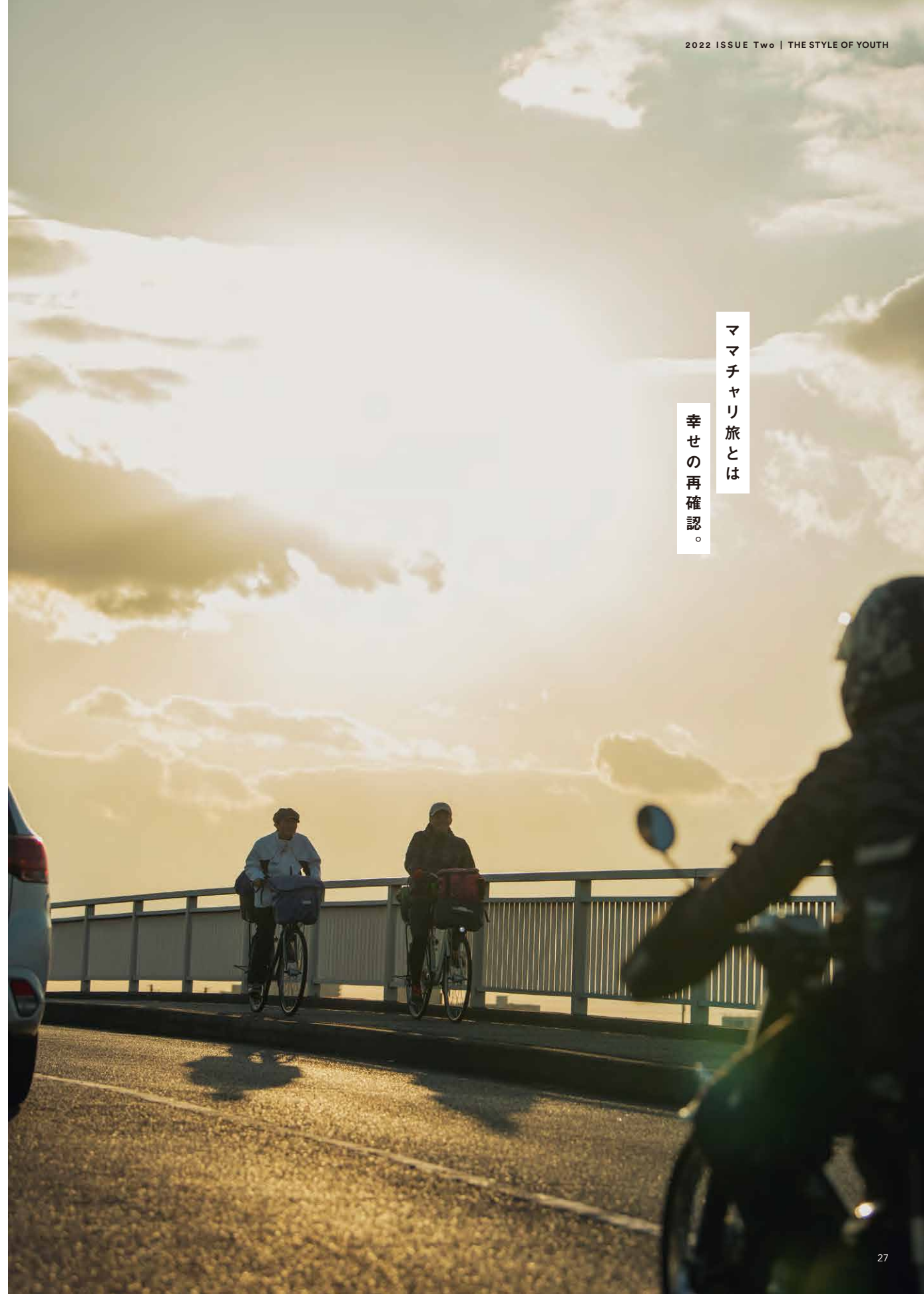
ぶくるは、彼や彼と同じ境遇の人が安心して働ける場所を、とNPO法人らのサポートで誕生。ロンドン視察にも行き、海を越えるという念願もなかった。「やっと社会経験ができた。車いすの店員が特別じゃない世の中になったらしいな」。働く喜びをかみ締めて生きる。そんな彼の次の目標は、ぶくるのエースになることだ。

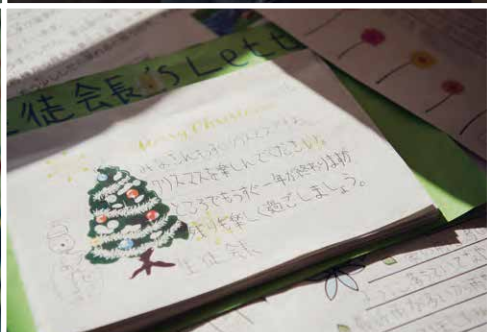


2人で初めて行ったのが四国。コンビニが70km先にしかなくて大変だった時も。「着いた達成感を味わうと、気が緩んで一気に疲労がくる。だからこいでる時が一番楽しいですね(笑)」

「いや、全く手を加えてないですよ。ただカゴを付けただけの、よくあるママチャリです(笑)」
2人は昨年の夏、なんとママチャリに乗って、四国まで5日間・577kmの旅へ。現地に3日半滞在し、日をまたいでこぎ続けた。ちなみに取材日も和歌山に出发する直前だった。
なんでママチャリ? と聞くと、「まずは荷物が載せられること。あとは、『え、ママチャリで行ったん!』と驚かれると優越感に浸れるんで(笑)」
旅には、最高の瞬間もハブニングもつきもの。料理人志望の2人らしく、「四国のカツオはやばかった」と口をそろえる。無口になるほどの満天の星空に包まれたことも良い思い出だ。極限状態の時には、知らなかった互いの顔も見えた。
ママチャリ旅の醍醐味(だいごみ)は、日常に感動を得られることらしい。「こいでると『あゝ、生きてる』って感じ。幸せの再確認のために、2人で自転車をこいでるんやと思います」

ママチャリ旅とは
幸せの再確認。









Photographer
ROB WALBERS

Profile

2010年ベルギーより来日。大阪で活動の後、現在は東京に拠点を移し、ファッション、ライブ、ポートレイトの分野で幅広く活動しユニークな世界観で活動中。国内外さまざまなアーティストやミュージシャンらがその世界観に魅了され支持を集める。今、世界が注目するフォトグラファー。

自分らしさを楽しめる。
それが、若い世代にとって
進化した「あまらしさ」

想像をはるかに超えて、ピュアで一途で、真っすぐ。
尼崎の若い世代にそんな印象を受けた。

そして彼らも大人たちと同じように、ごう口をそろえた。

「フレンドリーな人が多い」
「人情味あふれる街」
「いろんな人とのつながりがどんどん広がる」

これは以前、街の人々取材した時にも感じた「あまらしさ」だが、
彼らはさらに付け加える。

「周りの人が助けてくれる」
「大人たちが自分を応援してくれる」
「世代や地域を超えて、自分に手を差し伸べてくれる」

だからこそ安心して自分らしく生きられるのだ、と。

街や周囲が自然とサポートしてくれる環境があるから、
自分一人じゃないと思える。自分だけではかなえられない夢も形にできると感じられる。
自分が動けば、未来はきっと変わると信じられる。

この街が育んできたDNAは、間違いなく受け継がれ、進化している。
彼らを通して見えてきた「あまらしさ」が、そう感じさせてくれた。



TAKE FREE



Amagasaki

クセになる街

あまらしさ続々配信中。



amagasaki_style

#あまらしさ

